特集　社会ネットワーク分析の展開

ファイナンス・ネットワークとリスクの伝播
―金融取引の相互連関性からみる信用リスクとシステミックリスク―

菅　野　正　泰

目　　次

1．はじめに
2．ファイナンス・ネットワークの類型と分析方法
3．ファイナンス・ネットワーク構造の特徴とリスクの特定
4．ファイナンス・ネットワーク研究の最近の展開
5．結論

金融システムでは、銀行、企業、保険会社等が様々な取引を通じて相互に結びつき、ショックの伝播経路を形成する。本稿は、代表的なファイナンス・ネットワークを類型化し、中心性やリスク伝播の分析方法を概説する。さらに、相互連関性とシステミックリスクの関係を整理し、マルチレイヤー化、実体経済・気候リスクとの接続など近年の研究動向を展望する。

1．はじめに

2007～08年の世界金融危機は、個々の金融機関の健全性だけを観察していても金融システム全体の脆弱性を十分に把握できないことを明らかにした。ある金融機関の破綻が取引相手の損失を生み、その損失がさらに別の主体へ波及する場合、問題は個別主体の信用リスクにとどまらず、相互連関性（interconnectedness）を通じたシステミックリスクへと発展する。このため、金融機関や企業をノード（node）、それらの取引関係をエッジ（edge）として捉えるネットワーク分析が、金融安定性の分析手法として、世界金融危機以降定着してきた。

ファイナンス・ネットワークの対象はインターバンク市場に限られない。企業融資、シンジケートローン、株式持ち合い、CDS（credit default swap）、再保険など、信用エクスポージャーや資本関係が存在する市場には、それぞれ固有のネットワークが形成される。ネットワークの形状や中心的主体を特定する静的な分析に加え、デフォルトや資産価格下落などのショックがどのように伝

菅野　正泰（かんの　まさやす）
日本大学商学部教授。1989年早稲田大学理工学部卒業。同年４月、農林中央金庫入庫。2003年一橋大学大学院国際企業戦略研究科修了、修士（経営）「金融戦略MBA」、2006年京都大学大学院経済学研究科修了、博士（経済学）。新日本監査法人（現EY新日本有限責任監査法人）等を経て、2016年４月より現職。主な著書に、『入門　金融リスク資本と統合リスク管理（第２版）』（金融財政事情研究会、2014年）がある。

©日本証券アナリスト協会　2026